

エルミート行列の固有値分解アルゴリズム

1 原理

線形代数では、 $Q\bar{Q} = I$ すなわち、 $Q^{-1} = \bar{Q}$ という性質を持つ行列 Q をユニタリ行列 (unitary matrix) という。また、右上三角行列というのは、非ゼロ要素が体格の右上半分だけにある行列、すなわち

$$\begin{pmatrix} * & * & * & \cdots & * & * \\ 0 & * & * & \cdots & * & * \\ 0 & 0 & * & \cdots & * & * \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & * & * \\ & & & \cdots & & \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & * & * \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 0 & * \end{pmatrix} \quad (1)$$

という形の行列である (*には任意の数値が入る)。

エルミート行列の固有値分解は、QR 法と呼ばれる算術アルゴリズムによって達成される。QR 法 (QR algorithm) というのは、正則な行列 A が与えられたとき、

1. A をユニタリ行列 Q と上三角行列 R の積に分解する。すなわち、 $A^{(t)} = QR$
2. その結果を逆順に掛ける。 $A^{(t+1)} = RQ$

という 2 つの操作を反復して、固有値を求める。これらの計算は、固有値を変化させずに行列の形を変形するアルゴリズムであり、このような反復を繰り返すと、非対角要素の絶対値は次第に小さくなり、 t が十分に大きくなれば $A^{(t)}$ は対角行列に収束し、その対角項が固有値となる。

A を Q と R との積に分解する方法はいくつかあるが、ここではグラム・シュミット (Gram-Schmidt) の直交化法を紹介する。

この方法では、行列 A の第一列 a_1 、第二列 a_2 、 \cdots 、第 n 列 a_n を元に、行列 Q の第一列 q_1 、第二列 q_2 、 \cdots 、第 n 列 q_n を作る。このとき Q がユニタリ行列になるようにするためには、

- q_i と q_j が互いに直交する。すなわち、 $(q_i, q_j) = 0$ 。ただし $i \neq j$
- 各 q_i の長さは 1 である。すなわち、 $(q_i, q_i) = 1$

の条件を満たしていればよい。今回は複素行列を分解するので、内積 (x, y) は

$$(x, y) = x_1\bar{y}_1 + x_2\bar{y}_2 + \cdots + x_n\bar{y}_n$$

であることに注意が必要である。

そこで、

$$\begin{aligned} \mathbf{b}_1 &= \mathbf{a}_1 \\ \mathbf{b}_2 &= (\mathbf{a}_2 \text{ から } \mathbf{a}_1 \text{ に平行な成分を抜き取ったもの}) \\ \mathbf{b}_3 &= (\mathbf{a}_3 \text{ から } \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \text{ に平行な成分を抜き取ったもの}) \\ &\dots \\ \mathbf{b}_n &= (\mathbf{a}_n \text{ から } \mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_{n-1} \text{ に平行な成分を抜き取ったもの}) \end{aligned} \quad (2)$$

という要領で、 $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \dots \mathbf{b}_n$ を作り、各 \mathbf{b}_i をその長さ $|\mathbf{b}_i|$ で割って \mathbf{q}_i にするとよい。

より具体的には、

1. $\mathbf{b}_1 = \mathbf{a}_1$
2. $r_{11} = |\mathbf{b}_1|$
3. $\mathbf{q}_1 = 1/r_{11} \mathbf{b}_1$
4. $k = 2, 3, \dots, n$ の順に
 - (a) $r_{jk} = (\mathbf{a}_k, \mathbf{q}_j) (j = 1, 2, \dots, k-1)$
 - (b) $\mathbf{b}_k = \mathbf{a}_k - r_{1,k} \mathbf{q}_1 - r_{2,k} \mathbf{q}_2 - \dots - r_{k-1,k} \mathbf{q}_{k-1}$
 - (c) $r_{kk} = |\mathbf{b}_k|$
 - (d) $\mathbf{q}_k = 1/r_{kk} \mathbf{b}_k$

とし、こうして作られた $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_n$ を列ベクトルとする行列が \mathbf{Q} に、 r_{ij} を要素とする右上三角行列が \mathbf{R} になる。

参考: 戸川隼人著 (1992) 『UNIX ワークステーションによる科学技術計算ハンドブック』新装版 サイエンス社。

2 プログラムについて

QR 法のプログラムを以下に示す。ここで、配列 $H[N][N]$ は $N \times N$ のエルミート行列であり、固有値が複素ベクトル $Eigenval[N]$ に入る。なお、このプログラムはフリーの C コンパイラである、GNU C Compiler^{*1} に適するように書かれたものである。他のコンパイラを用いる場合、複素数型の宣言や演算について変更が必要かもしれない。

例えば、このコンパイラでは複素数型は

```
__complex__ int A;
__complex__ double B;
```

といった形で宣言する。複素数 $a + bi$ の実数部分 (a) は、

```
"__real__ A"
```

^{*1} gcc にはいくつかの種類があるが、筆者は Mingw32 を用いている。

複素数部分 (b) は、

```
"__imag__ A"
```

とすれば参照できる。また、共役複素数 ($a - bi$) は

```
"~A"(チルダ A)
```

で表現する。

2.1 プログラム

```
void GS_QR(__complex__ double *pt,__complex__ double *pt2,int N, int *pt3){
    __complex__ double H[N][N];
    __complex__ double B[N];
    __complex__ double Q[N][N];
    __complex__ double R[N][N];
    __complex__ double r,temp;
    __complex__ double Eigenval[N];
    double eps = 1e-100;
    int i,j,k,l;
    int FLG = 0;
    int count = 1;

    while( FLG == 0 ){

        count++;
        if( count == 100000 ){ FLG = 1; }

        //変数の初期化
        for( i = 0 ; i < N ; i++ ){
            for( j = 0 ; j < N ; j++ ){
                Q[i][j] = 0.0;
                R[i][j] = 0.0;
            }
            B[i] = 0.0;
        }

        /*Gram-Schmidt の正規直交化法*/
        for( k = 0 ; k < N ; k++){
            for( i = 0 ; i < N ; i++){
                B[i] = H[i][k];
            }
            for( j = 0 ; j < k ; j++){
                r = 0.0;
                for( i = 0 ; i < N ; i++){
                    r = r + ( B[i] * ~Q[i][j]);
                }
                for( i = 0 ; i < N ; i++){
                    B[i] = B[i] - ( r * Q[i][j] );
                }
                R[j][k] = r;
            }
            r = 0.0;
        }
    }
}
```

```

        for( i = 0 ; i < N ; i++ ){
            r = r + ( B[i] * ~B[i] );
        }
        r = sqrt(r);
        for( i = 0 ; i < N ; i++ ){
            Q[i][k] = B[i] / r;
        }
        R[k][k] = r;
    }

//新 H = RQ
for( i = 0 ; i < N ; i++ ){
    for( j = 0 ; j < N ; j++ ){
        r = 0.0;
        for( k = 0 ; k < N ; k++ ){
            r = r + ( R[i][k] * Q[k][j] );
        }
        H[i][j] = r;
    }
}

//フラグ
r = 0.0;
for( i = 0 ; i < N ; i++ ){
    for( j = 0 ; j < i ; j++ ){
        r = r + H[i][j];
    }
}

if( fabs(__real__ r) < eps && fabs(__imag__ r) < eps ){
    for( k = 0 ; k < N ; k++ ){
        Eigenval[k] = H[k][k];
    }
    //サイズの順に並べ替え
    for( i = 0 ; i < N ; i++ ){
        for( j = i ; j < N ; j++ ){
            if( __real__ Eigenval[i] < __real__ Eigenval[j] ){
                temp = Eigenval[i];
                Eigenval[i] = Eigenval[j];
                Eigenval[j] = temp;
            }
        }
    }
    FLG = 1;
}
}
}

```